

トリツトヤマ
パンカワグ 08-06
2010



巻頭詩

夏の終わりの匂いがして
ぼくらの季節はまた廻る
アルバムは埃を被って
君の笑顔は滲むけど
ぼくらのことばは錆付かない

ねえ、あの日のことばを持ってこの場所で待っています
伝えなかったことばも連れて、きみを待っています

盛夏（生か、死か）

アスファルトから立ち上る暑気楼に、
そしてビルの森の中でも鳴き喚く蟬の
声。わずかな土で、逞しく咲く向日葵。
滲む汗を拭いながら、道を行き交う人々。
車が吐き出す排気ガスが、夏の暑さを助
長していた。そんな日だった。

私はその日、生まれて初めて猫の死体を見た。血痕ひとつなく、死んでいるというよりはむしろ眠っているように見える、静かな死体だった。しかしながら、もちろん、眠っているわけではなく、確かにそれは死んでいた。生まれて初めて猫の死体を見た私ではあるが、もう既に死んでいるものであることを断言できた。

目を閉じて、横たわっていたそれは、不思議とペしゃんこだった。猫の肉が薄かったわけではない、これと言って表現し難い何かが猫だったものには足りていなかった。顎の下に投げ出された前足から、地についた尻尾の先まで、どこにも力が入っていなかった。生きていなかった。死んでいた。生きるという意味が、猫の死体からは欠如していた。血は一滴も溢さず、ただ魂だけがすべて、溢れ落ちてしまった、そのなれはてだった。

私はその日、生まれて初めて猫の死体を見た。それどころか、猫を飼ったことすらなく、知人の飼い猫や人を恐れない野良猫をひと撫でしたくらいしか、猫と交流したことはなかった。これは眠っているのではなく、死んでいるのだと一瞬で判断した後、だが、なかなか安らかな死に顔ではないだろうか、と思った。

目を閉じて、横たわっていたそれは、不思議とぺしゃんこだった。が、外傷もなく、猫の形がそのまま残っていた。私は、冬場、御婦人方が好んで身に着けるような、生き物を象った襟巻きを思い出した。ぐったりとした肢体は、中身がない、毛皮のかたまりのようだった。猫の死体はぬけがらでしかなかった。こんなにも死のにおいが充満しているのに、それと同時に、死を逸脱したもののかおりがする、矛盾を孕んでいた。

私は、猫の死体を通り過ぎるその短い間に、このようなことを考えたのだった。立ち止まらなかった。道行く人も、誰も立ち止まらなかった。そこに猫の死体があることに気付いてすらいない、そんな顔で誰しもが歩いていた。

たとえば、このアスファルトの下、芽生えることができなかつた一億もの種や、そしてアスファルトの上で干からびつつある蟬の亡骸や、項垂れるようにして枯れている向日葵、そういったもの。真夏日にさらされ、私はようやくそれらに気付く。

いのちに満ちている夏には、
いのちの数だけ、死があつた。

盛夏
(生か、死か)

It's too late now.

おはようございます、こんにちは、こんばんは。毎日暑いですね。きっと戸山祭当日も、残暑が厳しいのでしょうか。

—ああ、それから。お久しぶりです、そして、もしかしたら、初めまして。昨年度の卒業生・苧栳と申します。分かる人には分かるでしょうが、どんなにマイナーだと言われようが、地衣類はすてきだと思っているような人間です。

こうしてまた文学部の一員として戸山祭に参加できること、嬉しく思います。...ふむ、卒業したのなら自重しろと？それは無駄な要望です。だってもう完成済みですから。現・文学部員たちは、不肖たちの周到な計画に舌を巻くがいい！

おっと、今何かを口走りましたが。とにもかくにも、これも戸山と文学部への先輩の愛のかたちということで、堪忍して下さい。

戸山祭号ペンタグラムはしっかり載っていきます。(予告)

初めて〆切三日前に書き終わった感動と共に

苧栳

夏

青いだけじゃ能が無いと
気をまわしたりして
入道雲が幅を利かす
生意気な空のこと

遅刻気味の下り坂
走りもしない僕の
喉の奥で海の味がする
気取った朝のこと



眠れない夜の
越し方を
思いだそうと
もんどりうって
団扇を動かす
蒸した部屋のこと

無計画が趣味なのだ
ビニル傘越しの台詞が
妙に艶めかしい
夕立の日のこと

30cm先のケーキでなくて
君に焦点が合う
不可思議きわまりない
状態のこと



芝生の隅に
置き去りの
ランチが気にもならない
夢見る心の
行く先のこと

今ならば
電柱とぶつかって
僕が勝つ
足どり弾む帰り道のこと

恋

俺の昨日なんぞうらやむようならや
少年、お前さんの明日なんてや
たかが知れたもんさや

コーヒーカップが 聞いたこと

寝顔が一番いいわ
起きてはだめ、
射殺される気持ちがあるもの

まあ待て
チャイの中
涙が一粒落ちている
探すな 飲み干せ
それが心意気ってやつだ

お待たせしました？

なんのことはない。
猫舌がコーヒーを飲み干す程度の時間です。

氷ですよ、懐かしいですね
僕は
このキーンってやつが
何もかもを差し置いて、
一番の好物だったんですよ
夏を食べるって感じが
なんともたまらないですね



仕方がありません
あなたにとって今が恋でも
私にとって
何物でもないんですから

久しぶりだな、坊主
あいも変わらず
ストロー噛み潰してんのか

短歌四季

暁を覚えぬままに 春眠の
ふちに積もりし 黄塵の朝

炎天に辛き雫の消えゆけば
行く方知れず 温き風吹き

掃き跡の畝消し積もり紅き葉の
此処にも落ちて 其処にも落ちて

打たれ居て暖を迎えし湯の雨に
重なり落つる初時雨来て

あとがき

どうも、肇です。早速ですがなんだか文字数が少ないような気がする件に関しては突っ込まない方向でお願いいたします。内容が短文に集約されたわけで、別にサボっているとかそういうわけじゃないんです、バイト中に独り言を言いそうになりながら考えたんですから。

そうです、バイトと言えは夏休みの間とある編集プロダクションで雑用のバイトをしております…出版物ができるまでの過程が間近に見えてワクワクの毎日です。

さて、余計なことをつらつらと述べましたが、わけのわからないものを書いた身としては解説とかした方がいいんじゃないかと思われるので、簡単に。今回は前半部は仮想の人間の台詞という設定の下お送りしております。これとこれはもしかして同じ人の台詞で、この人とこの人はカップルで…なんて具合に妄想してくださると面白かったりしたりしなかったりです。後半部は過去一年で読んだ四季の短歌から各季節一首ずつを載せてみました。

それでは皆様ここまで読んでくださってありがとうございました。またお会いできる日を楽しみにしております。

全ての人に感謝をささげつつ。 2010/08/25 肇

フェティシズム

『…頃、つい先日廃止されたばかりの“死神制度”の…』

狭苦しい部屋の隅、最早骨董品としての価値しかないのではないかと疑いたくなるような箱型のテレビからニュースの司会者がすらすらと滑らかに語る。それは自分勝手に、常識という枷で固められた世界を映す。

「おい、これ」

男が一人、分厚いファイルから顔を上げ、砂嵐の混じる画面を見る。

「シン、これってさ」

そしてもう一人、寝癖を付けて机の上に突っ伏していた男に話しかける。

「んー？」

「これ、お前の担当のじゃね？」

そう言われるとシンは一瞬がばっと無精ひげの生えた寝ぼけた顔を上げたが、画面上を確かめると力尽きたかのようにぼたりとまた机の上で沈んだ。そして肯定なのか否定なのかいまいちはっきりしない声を上げた。

「んー」

だがもう一人の男にはそれで充分だったらしく、もしくは勝手に話を続けただけかもしれないが、まるで分かったような顔で話を続ける。

「やっぱそうだよな。死神が大量に人間の手、集めてたって奴だろ」

「んー」

「怖えよな。法の番人死神様が気の狂った殺人鬼ってか？世の中何が正しいのか分かんねえよな。いや、やっぱヒトゴロシばっかしてっと気が狂っちゃうのかねえ」

「んー」

そう唸ってシンは体勢は変えずもそもそ顔だけ前を向かせて、机の上においた手に顎を乗せた。生えっぱなしのひげが手に当たり少々不愉快になるが、起き上って顔を洗いひげを剃るなんて面倒な手順を踏む気にはなれなかった。

無機質なテレビ画面には最も有名であった、そしてこれからも最も有名であり続けるだろう死神の顔が浮かんでいた。

フェティシズム

一人目の死神は、心がないと言った。二人目の死神は感情がないと言った。三人目の死神は生きるための欲がないと言い、四人目の死神は血も涙もないと言った。五人目、六人目とそこからさきも同じようなことばかりだ。

ただ一人、風変わりな十三人目の最後の死神は常識がないと笑った。

シンはパソコンだのケーブルだの大量の書類だのと言った、凡そカウンセリングルームなんてものには似つかわしくない部屋で目の前に座る少女を見て、寝癖がだらしなくついた髪をいじった。着古してよれよれの白衣に無精ひげ、更には前述したように寝癖なんてつけた彼自身も凡そカウンセラーらしくも精神科医らしくもないが、それが本業なわけではまったくもってないのだから仕方がないだろうと彼自身は思っていた。だがしかし、目の前の手錠をはめられた少女はそうは思わなかったらしい。彼女は部屋についてからまず大事そうに抱えた手首のホルマリン漬のピンを自分の近くに置くと、シンの髪についた寝癖を見て、次に無精ひげを見て、白衣を見て、そしてまた寝癖を見ると、あからさまに胡散臭いとでも言うように目を細め

た。

シンとしては死神で、いかにも怪しいホルマリン漬けを持ち歩くお前の方がよっぽど胡散臭いんだよとか、確かに犯罪心理学なんてもんにうっかり手を出したこともあったが本業はごく普通の生物系の研究者なんだよとか色々言いたいことはあったが、とりあえずそれは心のうちに仕舞っておいた。何しろ相手は“死神”なのだ。法の番人死神。死刑執行代理組織。何とでも好きに言えばよいが、要するに政府公認の殺し屋さんだ。法律を違反すれば運転免許証のごとく点が引かれ、最終的に点がなくなればこいつらのご登場だったという訳だ。

そんな相手に軽口をたたけるほどシンは命知らずなわけでも、怖いもの知らずなわけでもなかった。

「ウタさん、でよかったかな？」

だから知り合いであり、この件の依頼主でもある人が寄り添った人ひとりの人生を書いたにしては薄っぺらいファイルを見ながら、間違っているはずもないと分かっているのにそう言った。円滑なコミュニケーションのための手段だ。まずは話しやすいところから。そういうことを意識している時点で自分が話ベタであるということ、まったくもってシンは気が付いていなかった。

「そうだけど、アンタは？」

彼女は凡そ女の子らしくない口調で、凡そ年上に向けるものとは思えない口調でそう言った。

その思いがシンの顔にも出ていたのだろうか、先ほどまでの眼光鋭い顔から急に目尻を下げてにひひひとこれまた女の子らしくない様子で可笑しそうに笑った。

「冗談ですよ、オニーサン。こういうこと経験少ないんですねえ。本物のこういう職業の人だったら、ぜんっぜん動揺しませんよう」

その顔は、死神なんて恐ろしげなものにはシンには思えなくて少し戸惑った。

「で、本職はこういうことしてないオニーサンはいったい何者なんですか？」

そう言いつつ羽太はあるときの“初対面”を思い出していた。

「俺は…」

「俺はゼロだ」

羽太が新しくペアを組むことになった死神は、羽太をちゃんと見ているのかよく分からないぼんやりとした目でそう言った。

死神というのは大抵二人組で行動する。某ギャング風に言うのなら、一人の死神は味気ないし、何より危険だ。最悪の場合は独り言が癖になる。これは頂けない。では三人組はどうかと言えば、なるほどチームとしては良い数かもしれない。しかし三という数はよろしくない。三人で行動すれば、二人がつるんで一人があぶれるというのが自然の摂理だ。特に死神のような奇人変人軍団の中ではそういう危険はますます大きくなる。と、言う訳で死神は二人組みなわけなのだが、実はこの二人組というのも大抵長くは続かない。

何せ殉職者が多い職業だ。法律的に言っても、法律の番人の死神にしたら皮肉な話だが、死神を返り討ちにしたところで何ら罪にならない。だから弱い死神はどんどんと死んでいった。聞けば零なんて羽太は十三人目の死神になるという。

零という少年は変わっていると羽太は思った。見たところ羽太とそう年が違うとは思えない。学校に通っていたら高校生くらいだと思えるのに、過去に組んできた死神の数はいくらなんでも多すぎる気がしたし(羽太は過去五人と組んだ)、目も俗に

言う死んだような目とか、生气というか覇気があまりない。そして何より笑わない。

それでも羽太は笑って零に手を差し出した。今まで組んできた死神たちもやっぱり変わっていたし、それが悪いことだとは羽太は全く思っていなかったのだ。

「ボクはウタ。よろしくねえ」

零はそれを見て、今までのまったくもってこの世界に焦点が合っていないような表情を初めて崩して、少し困った顔をしながら羽太の手を握った。その手を羽太は大きくて綺麗な手だと思った。

「手え、綺麗だねえ」

急にそんなことを言われてシンは驚いた。正確に言うなら、ビビった。

先ほど自分の役割(所謂精神鑑定という奴だ。本来ならちゃんとした専門家がやるのだが、死神相手となれば形だけで構わないということで、死んだところでまったく構わないシンが真に残念なことに選ばれてしまったようだ)を説明して、幾らか羽太は打ち解けてきて柔らかい声でそう言ったが、発言内容はまったくもってシンの心臓に優しくはなかった。

何しろ相手は猟奇殺人鬼なのだ。フェティシズムだかなんだかシンの知ったところではないが人をばらばらに切り刻んで、そこから手だけ持って帰ってホルマリン漬けにするような奴に、手を綺麗だなんて言われて平気な奴がいるのならお会いしたいくらいだった。いくら相手が手錠を付けていようとも。

だが羽太は人の気配に敏感なのか、それともシンが顔に出やすいだけなのかは分からないが、また可笑しそうに笑う。

「そんな取って食ったりしませんよう？」

「んー」

「とって保存したりはするかもしれませんが」

「…」

「冗談ですよ。そんな不安そうな顔しないでえ」

そう言うと羽太は突然座っていた椅子から立ち、床に散らばった書類をふわりふわりとよけながら零に近づいてきて、そしていきなりぐつと机に置かれた手に顔を近づけた。零はひつという悲鳴を喉の奥で殺して、じつと羽太の行動を見守っていた。手首を食い千切られるかもしれないという妄想は、あながち的外れとも言えない気がした。しかし羽太はそんなことを気にもかけずにじつと手を見ている。

「うん。やっぱり良い手え」

「手フェチ、なのか？」

「うーん。フェチと言えばそうなのかなあ？」

「手って人間のパーツの中で一番その人を表していると思わない？」

「ふうん？」

零は不思議そうな顔で羽太を見た。ペアを組み始めてしばらく経った頃だった。場所は路地裏。二人の隣には頭を撃ち抜かれた血まみれの死体が一体。

「例えばさあ、ゼロの手は大きくて傷だらけじゃん？そういう手って自分ひとりで進んでいけそうな気がするし」

「ふうん」

まるで気のないように零は答えた。

「爪は綺麗に切りそろえてあるから割合几帳面なのかなあって思うし、まあ実際そうだし、それにこの職に就いて長い」

「何でだ？」

「刀を握るとき長いと刺さるでしょ、掌に。それに血がこびりつくと面倒だし」

「ああ」

「刀使うから掌が固くなってるし」

「ほお」

そう感心したように言う零の手を羽太は取った。

「ささくれ剥いた跡があるから割合我慢の利かない性格かなあ？」

「ああ」

「あ、生命線短いねえ」

「この職についてて長い奴がいたらお目にかかりたいよ」

「あ、それに仕事線が迷走してる。今の職はあんまり良くないでしょう」

「そりゃあなあ。でも転職は不可だ」

そこまでいうと羽太は零の手を離して、代わりにその腰にぶら下がっている日本刀を借りて死体の解体作業に入った。真っ先に左手首を落とすとそれをピンに詰める。それを零は無機質な目でじっと見ていた。

羽太は今まで組んだ死神にこういう後処理を見せたことはなかった。こういうシーンに遭遇すれば死神だって人間と同じように大抵は嫌悪感を顕わにした。もしくは何が楽しいのか喜んでしまう奴なんてのもいたが、どちらにしたところで気分のいいものではない。だから、避けてきた。でも、こと零に関して言えばそのどちらの反応でもない気がしていた。

羽太は手早く死体を切り裂く。心臓、腎臓、肝臓などを傷つけないように気を付ける。上からのそういう命令だった。

「どうして解体すんだ？」

まるで無知な子供のように零はそう訊いた。

「運びやすいじゃん」

「ああ」

なるほど納得といった感じにそう言って、特に感情のこもらない目で羽太の作業を見ていた。それを気配で感じ取った羽太はやはりと思いつつ、解体の終わった死体をクーラーボックスに詰めていく。

「それ、ずっと気になってたんだがどうなるんだ？」

「さあ。臓器でも売りさばかれるんじゃない？」

「リサイクルだな。今流行りの」

「そうねえ。今流行りの。地球と環境と人に優しい」

「んで、俺たち死神にも優しい。何しろ無償で人間の解体技術が身に付く」

「百聞は一見に如かずなんて言うけど、体験に勝るものはないもんねえ」

そう言いつつ羽太はクーラーボックスに仕上げとばかりに謎の液体を注ぎ入れてぱたりとふたを閉め、歩き出す。零は刀を血振りし、それに付いてきた。

それを見て羽太はにひひと笑う。

「やっぱりゼロって常識がないねえ」

零はそれを聞いて不思議そうな顔をした。

「そういうのってボク、嫌いじゃないってか、好きだなあ」

そう付け加えれば、零はもっと不思議そうに眉を上げた。

「何かがないって言われることは多いけど、それは初めて言われたな」

「ふうん。他には何がないって言われるの？」

「定番はあれだな。血も涙もない、とか？失礼だよな。だったら星の王子様読む度に出るアレはなんだってんだよな」

「鼻水う？」

そう羽太が言うと、今まで淡々と話していた零の目が少し笑った気がした。だから羽太もやっぱり笑う。

「うん。ゼロは常識がないだけだよ、やっぱり」

羽太はそう、やっぱり笑った。

その無防備な笑顔に、シンは流されないぞという風に一度眼を瞑って深呼吸をした。酸素がきちんと脳内を回って少し冷静になればいい。ため息を吐くように息をゆっくり吐く。煙草が吸いたくなかった。

「じゃあそろそろ本題に入るか」

「はい。どうぞ」

まるで躰の良い小学生のような返答をする羽太に苦笑しつつ、シンは訊ねた。

「まずは相棒くん。零くんだけ？そいつ未だに発見されてねえんだけど、知らない？」

「さあねえ」

そうのみびりと羽太は言った。シンとしてはそれが本当に知らないのか、それともはぐらかしているのか良く分からなかった。だが羽太の声はまるっきりこれ以上この話題を続けることを拒んでいて、知っていたところで話す気はなさそうだった。依頼主からは無理に訊きださなくてもいいとは言われている。拷問で真実を言うようなタイプでもないし、痛みにもまったくもって強いから、らしい。第一無理に聞き出したいのならシンにこんなことを依頼しないだろう。

シンはどうか迷い、髪をがしがしと撫でつけた。強情に逆立ったままの寝癖はまるで羽太のようだった。

「んー、じゃあ手は？どうして手なんか集めてたんだ？」

ちらりと足元のピンに目を向けて言えば、羽太は初めて困ったような顔を見せた。ずっと飄々と受け答えをしていたのが嘘のように、目が右上、左上とせわしく動く。だがそれもしばらくすれば観念したようにシンと目を合わせた。

「言ってもきつと、分かんないと思うんだよねえ」

「言ってみないと分かんないだろ」

「でもねえ」

そう言って本当に困っている様子だった。

「例えばさあ」

「んー」

「ここに一つ目の人がいたとするでしょう」

「んん」

「そんな人がいたら、普通の人はその人のことをどうあがいたってある部分理解できないと思うんだ。まあ、理解したくもないかもしれないしねえ。それに“目は二つあるものだ”って常識がある人は、その人のことを受け入れられない。嫌悪感が一番先に来ると思うのねえ。それは悪い事じゃなくて当然のことだけど」

「つまり？」

「言っても無駄」

あまりにも潔く羽太はそう言った。

「だから、フェティシズムだと思ってくればいよう」

「フェティシズム？」

ホルマリン漬けの手首が大量に保管されている倉庫で、当然の如く“手”に囲まれながら、零はただただ不思議そうにそう訊ねた。

「そう。フェティシズム」

「手フェチとかの？」

「うーん。ちょっと違うのかなあ。本当は意味のないものに意味を持たせて崇拜するっていうイミ」

「ふうん」

そう言って零はまるで興味が尽きたかのように、ホルマリン漬けの手首を観察して回った。

羽太は初めてこの部屋を誰かと共有して、少しだけどきどきしていた。零であれば、少しも驚いたりしないと不思議な自信があった。

「何で集めてんだ、手首？」

「手はさあ」

少しいつもよりも上擦った声で羽太はそう話し始めた。誰かにこんなことを言うのも初めてだったし、これからも言う機会があるとは思えなかったからだ。

「その人を表すってボクは信じてるんだ」

だから感覚としてはお墓って言うのが近いのかなあ。そう羽太は笑った。

「ボクは別に人殺しが悪いことだなんて思ったことはないし、死ぬことにも別に何も思うことはないけどさあ、忘れられるのは悲しいかもって思うのねえ」

「なるほど」

そう言い終われば、羽太は手、一つ一つに思いを馳せた。ホルマリンに浮かぶ大小さまざまな手の持ち主のことを羽太はどれも鮮明に思い出すことができた。真っ白い小さな手の持ち主の綺麗な女の人の首を鎌で飛ばしたことを思い出し、日焼けした厚い掌の持ち主の体育会系っぽい青年の頭を銃で撃ちぬいたことを思い出した。

「じゃあさ」

そんなとき、唐突に零は言った。滅多なことでは自ら話しだしたりしない零が急に話しだして、羽太は目を丸くしながら零を見た。

零はそんな羽太の様子に、言いづらそうに唇を舐めた。

「俺が死んだら、手首持っといてくれよ」

羽太は笑って、いつの間にやら手に持っていたピンを撫でた。

シンは結局大したことを聞き出せないまま精神鑑定を終わらそうとしていた。

それに気付いたであろう、羽太は恍惚とした表情で愛おしげに手首のホルマリン漬けのピンを撫でていて、シンの背中に嫌な感じの汗がつかうと流れた。やはりいくら無邪気そうな少女であろうとも死神なのだとシンは思った。平気で人を殺すような存在のことが一般人のシンに分かるわけがない。

「質問は終わりい？」

「んー、そうだな」

「じゃあ、あとは死刑を待つばかりって訳だねえ」

そう羽太は呑気に言った。先ほどまでとは何ら変わらずに、にひひと楽しげに笑う。ぎくりと肩を震わせたシンの様子を目ざとく見て彼女は言う。

「そうなんでしょう？」

「んー」

適当にはぐらかした様に言ったが、シンはやはり分かり易いのか、少女はきちんとそれが肯定であると判断したようだった。

「じゃあひとつだけお願いがあるんだ」

「んー」

「ボクが死んだら、ボクの手をこのピンに漬けて欲しいんだよねえ」

まるでちょっと伝言を頼むかのように実に軽い言い方で羽太はそう言った。

羽太指示したピンにはすでに手が一つ、現実感を伴わずにぶかりぶかりと気楽そうに浮いていた。大きな男の手だ。几帳面に爪を切りそろえられた、傷だらけの、でも美しい手だった。

一人目の死神は、心がないと言った。二人目の死神は感情がないと言った。三人目の死神は生きるための欲がないと言い、四人目の死神は血も涙もないと言った。五人目、六人目とそこからさきも同じようなことばかりだ。

ただ一人、風変わりな十三人目の最後の死神は常識がないと笑った。

もし俺がこれから、そうなりたいというのなら、常識さえあれば普通の人にもなれるんだと笑った。

心なんてこの世の人間すべてに、あるようでないのだと知っていた。

感情なんて電気信号が起こす錯覚だと分かっていた。

生きるための欲がないのなら、もうすでに自分は死んでいるだろうと悪態を吐いた。

刀で傷を付ければ血も出るし、あくびをすれば涙も出る。そう、分かっていた。

それでも、少しだけ、救われた気がした。

あとがき

こんにちは、香芽です。

お久しぶり？もしくは初めまして。つらつらと駄文ばかり書いているものです。

今回ベソタグラムだすぞ！ってことで(そんなこと言いながらうっかり発案者の一人ですが)、リベンジを果たしました。

はい。二年前の文化祭号でどうにも未完な作品を出してしまって、後悔していた香芽さんは今回その設定と似たものをだして帳消しにしてやろうというズルイ思考を働かせました。

しかし所詮は“似た設定”なので微妙にリベンジになっていないような気もしますが、まあ、ねえ、それは…。うん。

まあそんな作者の悔恨なんてどうでもいいので、作品について。

何回も書いているくらいなので、すごい気に言った設定のお話でした。死神の話。

本当は長編用に考えていた話なので、かなり端折られていて分かりづらい仕様になっております。多分読んで下さった方々は、こいつ何が言いたいんだ？となるんじゃないかなあとびくびくしております。

まあびくびくした作者なんて放置して先に進みます。

確かこの話を思いついたのはフェティシズムって言葉を評論用語集かなんかで見たからなんじゃないかなあとうろ覚えています。二つ意味のある言葉を見るとネタにしたくなる人です。よく使うフェチの意味と呪物崇拜の意味があるのです。

ええ、現在浪人生なのですが、残念ながら現役生のときは知りませんでした。元文学部員のくせに現代文能力が非常に残念な作者です。

うん。あとはひたすらに作者の手フェチ魂がさく裂した話です。手フェチなんです。女の子の白いちっさい手も、男の子のでっかい手も好きです。筋張った手とか。あと親指の第一関節が外側に曲がる手が大好きです。すごいマイナーな好みですね。そんな手の持ち主の方、是非お友達になりましょう。

まああとは常識の話です。でもここでは面倒くさいので語りません。読んで下さった人が感じたことがこの小説の言いたいことだと思っていますし、ね。

あとは星の王子様への愛。大好きです、あの本。

まあそんな感じです。あとがきは75パーセントくらい作者の手フェチについてなんですけど、これ、いいですか？

文字が埋まらなくなってきました。と、いうことでそろそろお別れとさせていただきます。

では、読んで下さった方々、本当にありがとうございました。本当にふざけたテンションの作者にお付き合い頂いてありがとうございました。

こんな駄文ですが、もし何か思ってくれることがありましたら幸いです。

香芽

赤い樹の枝

赤い樹の枝

KAN

絵具、あるいはペンキの類

クーラーが過労でへばる18度の真夏
濁ったニューロンに流れる鉛の数かぞえる
テーブルの下の目覚し蹴って
フラッシュバックする青色の吐瀉物

胃液に溶かされた喉が
いやな酸っぱさで一杯なんだ

コップで水道水一気飲みして
流しで口に指つつこむ
逆流する青に赤いリトマス紙ひたして
どうしようもなく
やみつき

勝てる気がしない

気まずそうに逸らされた視線で
まだ目を見たことがないと気付く
あなたがたまに掛ける銀縁の眼鏡に
どうしても勝てる気がしないのです

クズです

あたしクズです こんにちは
今日もあの子に釘付けで
あの子の好きなあの人に
死んでくれって祈ってる

あたしゴミです こんにちは
得意技は嫉妬なの
今日もかわいいあの子にね
気易く触るなカス野郎

こっちを向いてくれなんて
口が裂けても言いません
だけどねあたし その代わり
せめて友達でいさせてね

あたしを愛してくれなんて
口が裂けても言いません
けれどねあたし その代わり
あなたの恋を呪います

ハローみなさん こんにちは
あたしクズです よろしくね
あたしあの子のお友達
泣き顔だけはあたしの物

夜

ああ 君
宇宙みたいな君だ
しんとした黒色の君だ
惹きつけて突き放す君なんだ

靄の曖昧さで微笑むのが得意な
夢の中の森に似た君だ
灰白く光る指でかき回して
牛乳とインクで螺旋を描いてる

夜空の一番黒いところをかき集めて梳いた
黒揚羽の触角のような流線型で締め付ける
一度だけでいいから
黒曜石の精密さで僕を絡め取って
そのずるい唇で嘲笑ってよ

なんてとうめいだ

笹の葉ですくった月の光のような
声、がきこえた すうっと
大教室の端から端まで届く
凜、とした あなたの、

余白

たっぷり1秒かけて捲った次のページの
8行目あたりにある余白の部分で
輪郭のなくなりかけた視線が
何度も行ったり来たりしている
どことなく、客観的

シャンプーが切れかけていたんだ
白っぽいやつ
アロエヨーグルトのにおい
僕のじゃない
君の

冷蔵庫にはりついた磁石くらいの引力で
いつかい、にかい
降りてこようとするまぶた
3度目の正直に逆らえなくて
糸が切れるちょうど0コンマ2秒前

ああ
君、じゃない
この本のはなしさ

遊園地の女神

ジェットコースター苦手な君
無理に誘って 大丈夫だよなんて
にやけた顔で言ってゴメンナサイ

ジェットコースター苦手な君
安全バー下げて 泣き出しそうな顔に
信じられないくらいドキドキするんです

高らかに鳴る発車のブザー
鼓動高鳴る 3、2、1！

正直たまらないんです
下り坂よりも君の悲鳴にクラクラする
正直とまれないんです
一回転よりも君の涙にグラグラする

正直たまらないんです
ごめんねって頭撫でながらアドレナリン全開
正直とまれないんです
次はお化け屋敷にでも行きませんか？

明日から

見開きで2ページ
線とか枠をムシして
大きい鳥を描いた
およそ7歳のころ

bookとかstudyとか
解の公式にメネラウスの定理
眠りかけた文字で写した
たしか14のころ

真夜中に目を覚まして
「あなた」「放課後」「屋上」
書いては消していた
あれは18のころ

開いてはめくって なかなか閉じられなくて
オレンジに染まって 電灯が点いて
いつの間にか あたたかい夕ご飯のにおいがする

どうせ予定通りになんて
行きやしないのが荷造りなんだ
沢山のことを思い出して
突然さみしくなる

本棚の端っこのほうで
埃かぶってた沢山のノート
ひもで縛って外に出して
やっとひとつ 息を吐いた

母さんの呼ぶ声がして
下に降りかけて振り返る
わたしね 明日から
名字が変わるんです

透き通った赤い樹の枝を折ったのに、
またすぐに元通りになったの

ボールペンをいじっている
その大きい掌をちょっとだけかしてもらおう
すこしかさついた36度5分の
薬指の関節に浮かぶ毛細血管を
あたしは爪で押しえつけたんです

ナハトムジーク

カッコつけて買ったブラックコーヒー
ミルクティー飲んでる白い指先に
愛ね・苦いね・ナハトムジーク
そのマフラーちょっと貸してくれよ
コーヒーぶちまけてやるから

自動販売機の横で
他愛の無いおしゃべりをする二十二時
遠くで聞こえるバイクの騒音と
君が口ずさむ調子っぱずれなコイノウタと
雲が邪魔した汚い空と
錆びかけた自転車が二台

曖昧に流れる時間に
なんだかとてもイライラして
缶コーヒーと「ちょっと黙れよ」を一气飲みした
苦そうだね けらけら笑う君の
黒い髪の毛を引っ張って
右手のミルクティー奪い取って
そして そして

公園の公衆電話の横で
切れかけた電灯眺めながら
愛ね・苦いね・ナハトムジーク
君の吐く息が甘ったるくて
妙に暴力的な気分になるんだ

部屋の電気の音がうるさかったから、消した

ふいにあなたの横顔が浮かんで
急にしらけてしまった
やり場をなくしたほてりが
体内に逆流して生臭い
軽く舌打ちしてから
あなたが悪いんじゃない
ってだるい脳みそ
誰に言ってるわけでもなく、ね

僕って
駐輪場の外灯にたかる蛾みたいだ
枯葉色のさ
毎日作業みたいに
リンポン吐き散らしてる

順応してしまった

はじめまして、あるいはどうもお久しぶりです。部活動という名の青春をともに過ごした方々の記憶の彼方でおぼろげに残っていてほしいKANです。数年前に部長をやっておりました。今はバンドと詩と読み聞かせと先生とコックさん（といってもファミレス）やっています。金欠です。腐った生活にすっかり順応してしまったため、典型的なごみ学生となり果てております。五月病をこじらせ不登校寸前までいきましたが、そんな陰鬱とした気分の中には不思議と詩が沢山かけた（過去形であることに注目）ので結果オーライです。

○詩集『赤い樹の枝』 久しぶりの一言感想！○

絵具、あるいはペンキの類：絵具とペンキはアルカリ性です。

勝てる気がしない：もしかして嫌われてんのかな。

クズです：若さってなんだ？刺々しいことさ。

夜：黒髪で首絞められたいです。

なんてとうめいだ：きれいな声ってふと耳に飛び込んできますよね。

余白：超眠い時って現実と色んなものがごっちゃになります。

遊園地の女神：かわいいよねっていう話です。

明日から：結婚を考える歳になったんだと知ってびっくり。

透き通った赤い樹の枝を折ったのに、またすぐに元通りになったの：表題作的な何か。手遊びが好きです。

ナハトムジーク：無理やりでもいいですか。

部屋の電気の音がうるさかったから、消した：主人公の性別が作品の印象を大きく変える良い例。

総評：大学生になって色々挑戦してみたはいいものの、私の欠点がここまで浮き彫りになっている詩集ってないと思います。同期の人なら分かるはず。でも今の私にはこれが限界で、これ以上新しい詩をかくこともできなかったのも、まあ折角の文学部同窓会ですし思い出アルバムの後に後で見てうわあああってなるのも一興かと思ったので載せちゃいました。

最近、というか元からですけど最近より一層という意味で、詩というものがよく分からなくなってしまって俗にいうスランプ状態です。かきたいときにかくが私のモットーなので放っておいてますが、そんなときには沢山読書をするとか抜け出せることが多いです。最近読んだのはみうらじゅんの『色即ぜねれいしょん』。こういう青春ぜんぜんアリだなあと思いました。

それでは最後になりましたが、この冊子を企画してくれた二人と展示場所を提供して下さった現役文学部のみなさんへ、感謝。

(10.08.17 バイト地獄の合間に KAN)

真夏のさーかす前日のはなし

真夏のさーかす前日のはなし

翌日の公演にむけて、朝の九時には始まったリハーサルを一通り終わると太陽は既に真上に昇っていた。

ああ、久しぶりに綺麗な薄水色だな・・・、とテントを出た勝は伸びをしたついでに目に入った空に対しそうおもった。これならきっと、明日以降も晴れが続くだろう。そうであればよいとも思う。そして、勝は頭の上で組んだ手を解いてゆっくり下ろして一息つく。それから少しの間その場に立ち尽くしていた。せみの声が鳴り響く。

ふいに風が流れた。すると、微かではあったけれど一緒においしそうな料理の匂いが漂った。途端に空腹を思い出し、腹の虫が抗議をはじめ。公演中や、練習のときなら何時間食べていなくても全く問題なく平気なのに、終わった途端に思い出したように身体は食事を求めるものらしい。それは勝にとって少し不思議だった。そのままそのことについて少しばかり思案してみたが、答えは出そうになかった。再び腹の虫が鳴く。・・・さて、ちょうどいい具合におなかも空いてきたし、さっそく昼ごはんにでもしよう。確か、今日の食事の当番はシシマルだったから楽しみだ。

「おー、ミケか。遅かったじゃん。いつもは一番乗りに来んののに、今日はいつまで経っても来ないから心配したぞ？」

そういう割には、シシマルは全く不安そうな顔はしていなかった。むしろ変わりなく普段通りだった。

「ま、色々だね。それより今日はこれ何？」

そういって勝は大鍋に入った赤いスープに目を落とす。見たところシチューに似ていたが、勝は今までに赤いそれは見たことがなかった。

「ああ、これな。ボルシチって、ロシアの料理だ。食ったことないか？」

シシマルはおたまでスープをかき回し、それから手についた器にそれをよそっていく。

「ふーん、相変わらず器用だね。俺なんて炒飯もつukれないよ」

「ああ、前のあれか。あれはなかなか面白かったぞ。俺、団長が渋い顔してるよこなんて、始めて見たよ。ほい」

「どーも。おかげであれ以来、もう料理なんて作る気失せたよ」

器に盛られたボルシチとパンとを勝は受け取り、近くの椅子に腰掛けた。その後すぐにシシマルも自分の分を持って向かいに座る。そして二人しておもむろに食べ始める。互いに特に何も喋ることもなく無心にボルシチを口に運んでいたが、半分ほど食べたところで勝が思い出したように口を開いた。

「そーいやさ、団長どこにいの？さっき軽く探してたんだけど、見つかんなくてさ」

そう言われてシシマルは、少し思い出すようにしてから、

「あー、何かあっちこっち人に会うとか言ってたな。なんだ、用事があんのか？」

「んー、まあ、そんな感じかな」

「なんだよ、微妙だな。まあいいや。じゃあ団長が帰ったらミケが探してたって言っとくよ」

「ん、ありがと」

そしてまた食事を再開する。

食事を終えて勝は目的もなく辺りをぶらぶらしていたが、結局ステージのあるテントに戻った。

さほど大きくはないテントだけれど、パフォーマンスには十分な大きさの円状のリングに、見やすいようにそれを囲む階段状の観客席、そして何よりリングの上空、空中ブランコがあるのが勝は気に入っていた。勝はとんとんと軽快な足取りで誰もいない観客席の間からリングに向かって降りていく。それからリングの端に立っているはしごをするすると上り、勝が言うところの二メートル四方の舞台袖に立った。

そして。

ぐっとブランコを掴んで、足場を蹴って空中に躍り出る。

ブランコを両手でしっかり掴んでい続けないと遠く体が持っていかれそうな感覚が、勝が自分のステージにいることを実感させる。左右に二

、三度振れて勢いをつけてから手を離す。勝は心地よい浮遊感に包まれながら、足をおなかに抱えて空中で三回転する。そしてまた体を開き、向かいのブランコに手をかける。その勢いでブランコは勢いづき、大きく左右に振れる。同時に勝の身体も小さく揺れる。そのまま勢いを十分につけ、リズムを整え安定したところで片手を離し、身体の向きを反転させる。離れた片手を再びブランコに掴ませる。そして最初と同じようにまた両手を離し、空中で三回転してから、反対側のブランコを掴む。これを何回か繰り返した後、勝は全身で勢いをつけて逆

上がりの要領でブランコの上に体をもっていき、ブランコを支えるロープ掴んでから器用にブランコの上に座った。

すると、誰もいないはずの観客席から拍手が響いた。

「いやー、すごいね、君」

勝が演技している最中、一番前の席にいつの間にか一人の女の子が座っていた。彼女の見た目から、勝は自分とさほど年が違わないだろうなど、知ったところでどうでもいいような事を思った。

「一体どのくらい練習してんの？」

「それよりも君さ、ここは一般人立ち入り禁止だよ。公演なら明日からだよ」

「知ってるよ」

彼女は全く気にも留めてない風に言った。

「じゃあ、帰ってくれないかな」

「べっつにいいじゃん、そんな細かいことはさ。それより質問答えてよ。君、そんなに出来るようになるまでにどの位かかったの？」

勝は正直、彼女の図太さに内心舌を巻いた。そして勝は、ああ、きっと俺が質問に答えるまでは意地でも帰らないんだろうなと悟った。

「八年」

彼女の根気強さに敬意を表して、勝は答えることにした。

「何？聞こえないよ」

「八年」

「・・・分かった。君がそんなところにいるのがいけななんだよ。聴き取り難くってしょうがない」

そして彼女はジェスチャーで手招きした。こっちに来いと言うことらしかった。勝は嘆息して、それから高さおよそ十メートルほどの高さにあるブランコを背中から飛び降りた。空中ブランコのとぎのときとび移りとはぜんぜん違うただの落下を勝は実行した。観客席にいた女の子は勝の行為に驚いたのか、思わず立ち上がっていた。手で目を覆い隠すも、僅かに指が開いていた。

勝はそのまま落ちて、練習のときには張ってあるネットに飛び降りた。すぐには衝撃を収集することはもちろん出来るはずもなく、勝の落ちた場所のネットが引つ張られ、そして、跳ね返す。トランポリンに似たように、ネットで二、三度跳ねてから静かになる。あとはいくばくもない高さの位置にあるネットから飛び降りて、観客席にいる人の前に進む。静かになったところで、飛び降りたブランコの金具部分がこすれて奏でてきいきいとテント内に響く。

「君ね、もうちょっとさ・・・なんていうか・・・」

「大丈夫、何度もやってることだから。はしご下りるよりらくだから、時々そうしてる」

「ふーん、そういうもんなのかねえ・・・」

「そういうもんなんだよ。ちなみに、さっきの質問だけさ、八年やってる」

「えっ!？」

その言葉に彼女は驚いたような顔をする。そして、まじまじと勝の顔を覗き込む。まるで、そうすることによって今言われたことが本当なのかどうか知れられるかのように。

「それ本当？」

それでもよく分からなかったのか、結局彼女はもう一度たずねることにしたらしい。

「こんなとこで嘘ついても、得しないしね」

「君いくつ？」

「今年で十六になる」

「えっ、あ、私の一つ下なんだ。君ちっちゃいから中学生くらいかと思った。えっ、あ、ごめん、ちっちゃいとかいわれたくないよね、謝るって。だからそう睨まないで」

言いつつ彼女は顔の前で手を合わせた。

「あれ、でも君今十六で、八年やってるってことは小学のときからやってんの？」

「・・・まあ、そうなるかな」

「だとするとさ・・・」

「おいミケ君いますかー？いるなら返事してください。いないならいないって言ってくださいー」
彼女が何か言いかけた言葉にかぶさって、テントの入り口から勝を呼ぶ声に消された。

「いなかったら返事できねーだろ」

そういいながら勝は入り口に向かって歩き始めた。あっけにとられた彼女は、そのまましばらく動かなかった。

「それもそうですね、いなかったら返事は出来ませんね」

「いい加減頼むよ、団長」

「ははは、君に心配されるようじゃワタシも大分落ちぶれたものですね」

笑いながら、途中勝の方を越した向こう側に、テント内部が暗くなっているからよくは見えないけれど、それでも人がいるらしいことを団長は見つけた。

「もしもーし、リングの近くにいるその人もこっちに来ーい」

相変わらずの気の抜けた呼びかけではあったけれど、それでも少し呆けた女の子を正気に返らすには十分だったらしく、慌てて小走りでもってきた。

「あー、えっとあなたは・・・春日さん・・・じゃなくって、春野さんでしたよね？」

「えっ、あつ、はい、そうですけど。何で名前が分かったんですか？」

その質問に対し、団長は少し不思議そうな顔をしてから、何かに気づいて、そして微笑んだ。

「だってあなたを雇っているのはワタシなんですよ？名前くらい分かって当たり前じゃないですか」

そういわれて、春野はまた少し驚いた。彼女が雇われているのは本当のことだったが、一週間しか働かない仕事だったのだ。しかも、ここで実際仕事をしたのは今日がはじめてだった。強いて言うなら、前に一度仕事内容の説明が一時間ほどあったくらいだろう。

「なあ団長、そんなことよりさ、バイク貸して」

「人が話してる最中に話に割り込むのはあまりいいことじゃないですよ、ミケ君」

「もともとは俺に用事があったんだろ？」

「ああ、そういえばそうでしたね。あれでもこの場合、用事があったのはミケ君であって、ワタシを探してる風なことをシシマル君から聞いてからここに来たわけで、この場合、ワタシが用事があるっていうんでしょうかね？・・・まあ、いいでしょう」

そういって団長はポケットから地方のマイナーなマスコットキャラのキーホルダーのついた鍵を取り出し、勝に手渡した。それを勝が受け取ると、サンキュっというてからテントから出て行った。彼を見送ってから、春野は口を開いた。

「すいません、少し聞きたい事があるんですけどいいですか？」

「んー、私の本名は斉藤雄也。皆からは団長と呼ばれてますね。歳は三十二才、七月二十六日生まれの B型です。趣味は旅行で、甘味はあまり好きではないですね。他には？」

そこまで団長が喋ったところで、春野は苦笑した。それに対し、団長は微笑んでいる。

「えっと、さっきの、ミケ君、でしたっけ？彼、どうしてここでサーカスなんてやっているんですか？」

「あなたは、どうしてそれが気になるんですか？」

思っていなかった返しがきたので、彼女は思案する。

「うーん、特に理由はないかな。単なる興味だしさ」

「ふーん、興味、か。まあ、いいでしょう。面倒なのと彼のプライベートのこのなのであっちこっち色々省いちゃいますけど、数年前にワタシが拾ったんですよ。それからまあ、てんやわんや、すったんばったんしているうちに彼に懐かれてしまったんで、そのまま面倒見つつ連れているわけです」

大分おざなりな説明だったが、彼女は一応は彼がここにいる理由が分かった。気になるとどうでもいいことでも、自分なりに解釈つけなくてもやもやするのは自分の悪い癖だと内心で思う。

「では、ワタシもまだまだ用事があるのでこれで失礼させてもらおうか。明日からの仕事ぶり、期待してますよ。ぐっどばい」

団長は限りなく日本語の発音で別れの挨拶をして、外へと出て行った。

サイズの合わないヘルメットをかぶって、バイクを走らせ始めてからおおよそ二時間半。勝は単調に流れゆく景色に辟易しながらも、どうか目的地に辿り着いた。夏の終わりが近い頃ではあったけれど、後に時間でもバイクを走らせれば日本の諸列島を除く最北端に辿り着くこの地域までの道のり、結構なスピードで走らせていたためか、勝の身体は薄ら寒く感じていた。それにしても・・・、久しぶりにここに来た

けれど道中相変わらず人はあまりいなかった。初めのほうは、市街地を走っていたから信号もそれなりにあったけれど、途中からは信号どころかすれ違う車の台数も全然なかった。この一時間でせいぜい五台見かけたくらいだろうか。

それでも一応、車の通行の邪魔にならないようにバイクを道の端に止め、それから椅子の下にヘルメットを入れ、変わり日中で買った菓子折りを取り出す。そしてこちらの目に見える範囲内で唯一だろう建物のお寺に向けて足を運ぶ。

まず住職さんに挨拶をしようと勝があたりを見渡すと、目的の人はすぐに見つかった。

「お久しぶりです、住職さん」

勝は掃除をしている袈裟を着たおじいさんに話しかけた。年のころはおそらく七十はあるのではないだろうかと思われるのだが、あごに生やしている白鬚は立派なものだった。彼は、未だに竹箒を使って掃除をしているのだが、扱いがうまく辺りはきれいだった。呼びかけられても住職さんはまだ丁寧に掃除を続けていた。

「お久しぶりです、住職さん」

聞こえていないのだろうかと思って勝は近づいてからもう一度言った。すると住職さんは今度はゆっくりと顔を上げ、勝の顔を見た。そしてにっこりと笑った。ああ、前と変わらないなこの人は、と勝は彼の顔を見ながら思った。勝は、この住職さんの笑った顔が昔から好きだった。彼の笑みはとても柔和で、特に目元に出来る目皺住職さんの穏やかな性格を現しているようだった。

「ああ、ええと、済まんう、君は誰だったかな？」

「村上勝です。八年前にお世話になった村上源蔵の孫です」

そういうと住職さんはしばらく顎をさすり（顎鬚をさすり）、ほどなくしてははあ、あのときの。とつぶやいた。

「悪いのう、最近年のせいか、すっかりぼけてきてしまっとな。突然の来訪じゃと、すぐに誰か思い出せんようになりおっの。しかも最近じゃあ目も悪くなり始めたらしくっとなあ。この前なんか味噌汁を作ろうと思って、炊飯器で作ってしまったのお」

そしてふおっふおっふおっ、と笑った。気持ちいい笑い方だった。勝も出来ることならこんな風に年を取りたいなど、心に浮かんだ。

「あ、これつまらないものですが」

といいながら持ってきたお菓子を渡す。おお、これはご丁寧にのお、と住職さんは受け取った。

「それにしても勝君、大きくなったのお。今いくつじゃ？」

「十六です」

「そおかそおか、確かわしの孫もそのくらいだった気がするのお」

そして住職さんはまた目を細めた。

「それはそうと、今日は墓参りにきたのかいな、勝君？」

「ええ、そうです」

「そおかそおか、いいことじゃ。きっとお前のおじいさんも喜ぶじゃろう」

「では、これで失礼します」

そういつて勝はお墓のほうへ向かった。

しばらくぶりに来たけれど、源蔵のお墓はきれいにされていた。きっとあの住職さんが時々掃除してくれているのだろうか。それでも一応勝は一通りお墓をきれいにしてから、線香と花を供え手を合わせた。どうか、明日以降の公演が無事に済みますように、と拜んでみたりもした。

大分時間が経ったのか日が沈み始めて、空が茜色にそまってきた。都会ではもうあまり見る事のなくなったトンボも、こちら辺では数多く飛んでいた。勝はバイクでしばらく来た道を帰っていたが途中で喉が渇き、次に見えた自動販売機でいったん止まり、缶ジュースを購入した。そして、止めたバイクに寄りかかり缶をあけジュースを口にした。

そこはちょうど川のほとりのどての部分で、斜めに川が見えた。川原では兄弟なのだろうか、まだ小さな女の子と男の子が手をつないで走り回っていた。手をつないだまま走ることに慣れていないのか、時々二人して転んだりしていたが、泣くようなことはなくむしろきゃっきゃと笑っていた。遠めに見ているだけでもその二人が楽しそうなことは分かった。勝は缶のジュースを一気に飲むようなことはしないで、あえて少しずつ飲むようにして子供たちを見ていた。

走り回って疲れたのか子供たちは座り込んだ。そして今度は彼らは持っているバックの中を漁り、何かを取り出した。けれど、勝からはよく見えないから何を出したかは見えなかった。するとすぐに、子供たちの辺りから虹色の球体が浮かび上がってきた。つまりはシャボン玉だった。いくつかの大きく膨らませたものも、無数の小さく作られたものも、光の加減で色が移り変わっていた。そして風に遊ばれて高く高く

連れていかれ、夕焼けの中に吞まれて見えなくなった。

ああ、なんて喉かな光景なんだろうか。

近くに車が止まって、中から男の人が出てきて、子供たちに向かって帰るぞーと叫んでいた。すぐに子供たちのはーいという返事が聞こえ、

彼らは一緒に土手を登ってきた。途中そのお父さんらしき人が勝のほうをいぶかしむ目で見ってきたので、勝は慌ててジュースを飲み干しバイクにまたがった。出発する寸前、勝は後ろを振り返って盗み見ると、子供たちはニコニコとした様子で車に乗り込んでいた。そして勝は思いついたようにバイクの椅子の下から慌ててピラを一枚取り出し、その車に駆け寄った。

「えっと、すみません。このピラに書いてある場所で明日から一週間サーカスをやってるんですが、良かったら来てください」

そういってピラを手渡し勝は営業用のスマイルを浮かべた。そのとこの人はピラに視線を落とし目を通す。なかなか車に入らないお父さんに痺れを切らしたのか、男の子が車の窓を開けて顔を出した。

「ねえ、お父さんどうしたの？」

「ん、ああ、大丈夫だよ。もう乗るよ」

「あ、おとうさんそれなあに？」

続いて女の子も顔を出した。

「このお兄さんがくれたピラだよ。サーカスをやってるんだって」

「えー、さーかす？見たーい」

「さーかす、いきたーい」

車の中で子供たちははしゃぎだした。そしてその男の人は子供たちの顔を見て、笑って二人の頭を撫でた。

「わかった、いくかサーカス。だけどな、お父さんは明日から仕事だから、この一週間いい子にしてお母さんのお手伝いも出来たら、次の土曜日に皆一緒に連れて行ってあげるよ」

「やったー」

「ほら、もう行くから窓を閉めなさい」

そして、その男の人は勝のほうに振り返った。

「というわけで、せっかくだから来週の土曜日に見に行かせてもらうよ」

そういい残して車の中に入っていった。それからすぐに車は発進して走り去っていった。

一人残った勝はヘルメットをかぶり、バイクにまたがり団長たちのいるさーかすテントに向かって走り出した。勝は、さっきの子供たちも、明日から来る観客も皆、心から楽しんでくれるかな、とか思いながら帰っていった。

あとがき

ごくごく一部の方々お久しぶりです。大多数のそうでない方、はじめまして。夜月と申します。

今回この作品、ほとんど全部分にわたり趣味に近いもので書いたものです。たらたらと長くなって読みづらいという方、ごめんなさい。でも、言い訳させてください。文章を書くときには、こんな感じにしかかけないのです、勘弁してください。

それと、ミスタイプや誤変換もあるとは思いますが、そういうのが見つかった場合は、皆さんの優しさに期待します。

さて、挨拶(?)もほどほどに、何が良かったのかも自分でも分からない体たらくですが、多分言いたいことは、この作品を読んで楽しんでくれたのなら嬉しい限りです。ということだと思います。

それでは、この辺で切り上げます。それでは。

真ん中に空いた穴

真ん中に空いた穴

溜息を一つついて、肩を回した。

あなたが置いていった本をたった今売ったばかりだった。もらったその他のものは既にネットオークションに出品し終わっていた。副都心にあるマンションの自室で、ジョージ・ウインストンのピアノを聴きながら、一番大きな紙袋に、まるで新聞を資源回収に出すときのような感覚で——内容はおかまいなしに、ひたすらに持ちやすさを追求して——敷き詰めていった。10冊～15冊くらいあつただろうか。経済学の本から犬の写真集まで、もともとどれくらいの値打ちがあつたかなんて考えず（だって全部あなたのお金で買ったものでしょう）うちから2番目に遠い大手チェーンの古本屋のカウンターに投げ出してきた。茶髪を無造作に高い位置でまとめ、店のロゴ入りの紺のエプロンをした私と同じくらいの年の女の子がレジには立っていた。彼女は私には分からない基準で本に値段を付けていく。古くて買い取りができないという本1冊の処分も快く引き受けてくれ、最後に私は1000円札1枚と小銭を少し受け取った。1冊10円くらいかと考えていた。思ったより高く買い取ってくれたな、とちよっと笑う。売れている本だったのかしら？高価な本だったのかしら？どちらでもいい。大事な本を黙って売ってしまったところで、どうせ私にはそれを伝えることすらできないのだから。

2か月前の、つきあい始めてから3年の記念日に電話をくれなかったときから薄々感づいてはいた。記念日や誕生日は忙しくてもいつもまめに連絡をくれたあなたを訝しんだ。その時はそれが最初だったから、なんだかんだうまい言い訳を自分で考えて（エアメールが届くのかしら、それとも明日辺りサプライズで急にドアのベルを鳴らしてくれたりする？）、そして時間の経過と共にことごとくそれらは否定されていった。こちらから電話をかけたがそれもつながらなかった。自分以外のあなたの好きなものに頼る感じがすごく嫌だったけど、あなたが一番好きな犬の絵はがき（サモエドのそれを探すのは非常に苦労した）に、簡潔にいくつか文を書いて（あいさつ、私のこと、日本のこと）ニューヨークに送った。返事を下さいとは書けず、そして返事は来なかった。もし書いていたら返事をくれた？どうだろうね。

空になった紙袋を畳んで、財布などを入れていた黒の小さな鞆にしまい込む。まだ蒸し暑いけれど、それでも日が暮れるころには風が気持ちよく感じられるので薄手の長袖白ニットを選んだのは正解だった。同じ店に売っているCDなども物色したけれど、このお金で買ったものが家に残るのは嫌だなと思いつつ自動ドアを通り抜けた。定期券で

行ける駅の付近ではあるものの、このためにわざわざネットで検索した、ふだんはあまり来ない場所。気怠さと物珍しさから駅までの帰り道はゆっくり辺りを見て歩く。そう決められているのか、ここ一帯は二階建てより大きい住宅がない。空がよく見える。地平線のあたりだけが紫に近いピンクになっていて、でもそこも次第に闇に浸食されていく。

ここを曲がってまっすぐ行けばもう駅だ、という角でふと洋菓子屋さんを見つけた。パリの街並みと女の子達のイラストが描かれたガラス越しに中をのぞき込む。土曜日なので人は少ないが、普段は会社帰りの人などがついでに買っていったりするのだろう。無性に甘いものが食べたくなり、消えものだしせっかくだし、とドアを引いた。

昨日は仕事を終えて帰宅してから日付が変わるまで、知り合いに勧められたDVDを見ていた。友人から何通かメールが来ていたので、それに返信してからソファでまどろむ。休日に甘えて途中何回か起きながらも10時位までうとうとし、シャワーを浴びにスリッパを履いた。左手に食パン、右手にテレビのリモコン。同時多発テロ追悼式典に関するニュースが流れ、牛乳を流し込みながらニューヨークで日付が変わるのは日本が翌日の午後1時になるときだと思い出した。13時まで掃除したり電球を替えたりして待った。13時になって、ニューヨークでも9月10日が終わった。ベッドに倒れ込んでしばらく天井を見ていた。一番仲のいい友人にメールをした。休日が忙しい職業なのでしばらくは返信が来ないことはわかっている。

私の誕生日に、とうとうあなたは連絡をくれなかった。

いらっしやい、と声をかけた上品な装いのおじいさんに軽く会釈し、ショーウィンドーをのぞき込む。色とりどりの、幸せなケーキたち。

3年前は近所でイチゴのショートケーキを買ってきてくれた。

一昨年はサーティーワンのアイスクリームケーキと一緒に買いに行った。

去年はスカイプでそれぞれの国で買ったケーキをお互い自慢し合った。

今年は？

続いてくはずだった永遠の、あつけない崩壊を咀嚼してすぐ飲み込めるほど、私はものわかりがよくなかった。そして、それゆえに今年も買わずに済ませられそうにはなかった。

ハッピーバースディ、私。

どれを買ったところでそれを食べられるかはまた別問題だった。ただ私は、このあと身を投げるのでさえなければ、自分をもう一度軌道に乗せるために、誰も言ってくれない明白な事実をまずは受け止める必要があった。泣きながらも、宝物が知らない間にどこかで手からすり抜けていたことをきちんと思い知らないと前に進めないと思った。そうでもしないと、——この2ヶ月間がまさにそうだったが——まだ、そこらを探せばそれがすぐに見つかるような気がして、砂を払ってもう一度抱きしめれば何とかなるような気がして、どこへも動けなくなってしまいそうだった。

先ほどの好々爺と目が合い、注文を告げた。閉店間際で種類や数は少なくなっている。妙にひねくれた心が働いて、いかにも誰かと分けて食べましょうねとでも言いたげな、丸い、完全な形のバウムクーヘンを選んだ。クリームやフルーツの載ったケーキは、もっと幸せな食卓に出されるべきものだった。気を遣ってそっと運ばなきゃいけないような、そんな繊細な作りのものは嫌だった。どうせ捨てるより他にないあなたとの最後のつながりを、ここにきて大事なもののよう扱いたくはなかった。

これが最後でいいから、あなたの手は煩わせないから、せめてお金くらい、ね？

お会計時にお札を一枚出したとき、切り分けられたケーキはせいぜい500円だしホールケーキも2000円はかかるので、値段的にもちよほどよかったことに気付く。店舗の外装と同じデザインの袋に入れてもらって、おつりはポケットに。今度どこかで募金でもしよう。

日はすっかり暮れてしまった。踏切の音が聞こえる。私が乗る方向の電車？もう出てしまった後？それとも駅に止まる前？どのみち間に合わないだろう。黒のマニッシュなハットを目深に被る。自分の影が長く長く地面に移る。

アスファルトの隙間から咲いていた花を踏みつぶしてから信号を渡った。

舌足らずなわたし

舌足らずなわたし

花占いとお伽ばなしにさようなら
夕べのお茶もいらさないわ
加えたさとうはしずかに溶けた
そんなものにはだまされないの

こがねにあかるいちいさなつきの
ひかりを浴びた窓の外
あれはほんとはお空の穴で
いつかあなたがかおをだす

久しぶりだね 千匹の
うさぎがはねる夜の夢
竹やぶに沿った苔のこみちで
匂いに囚われ名まえを叫ぶ

伝わってるかな まってるの
あなたのむかえをまってるの
それともわたしが行けばいい？
ああ 会いたいな会いたいな
わたしは今も舌足らず

ぼやけた視界

ぼやけた視界

叫びすぎて喉は噎れてしまった
泣いても鼻の詰まるばかり
睡眠不足で目は赤く
耳が拾う嗚咽は不快
頭も上手く働かない

裏腹に健やかな肢体
ばっちり五体満足です
まだまだ走れるはずなのに
その字のごとく
俺の頭が足手まとい
首から上を落としたら
いっそ元気になれるでしょうか？

飢餓と後書き

こんにちは。

ご無沙汰しております，丸川刈馬です。あるいは初めまして。
韓国のりが最近のマイブームです。めっちゃめっちゃ美味しいです。
以上，近況報告でした。

書いたもの（作品と言うにはおこがましい）について

- ◆真ん中に空いた穴・・・バウムクーヘンlove。お友達からお題をいただきました。こういうのでいいのか？とか思ったんですけど，思ったより筆が進むので。9月11日のお話なんですけど，戸山祭今年も早いですねー！十分な準備できるんでしょうか。あ，お節介でしたらすみません。
- ◆舌足らずなわたし・・・書く上で「漢字はすべてカタカナで構成されているもののみを使用可とする」という自分ルールを設けたのをひとつ。刈・・・メとりから，みたいなやつです。だいぶ苦しいものもあります・・・。十五夜なイメージ。
- ◆ぼやけた視界・・・ノリで書いたおまけ（？）

在校生，来校者の皆さん。どうかこの後も戸山祭を楽しんで下さい。こんなに目を留めて，読んでくださっていることありがとうございます。
文学部同期のみんな，ペソタグラムつくれてよかったです。また何か書いたら，私にも読ませてね～

ラジアン池に愛を込めて
まるかわかるま

探し物

探し物

織村紅羅璃

旅に出よう。

思い立ったときには、からだが動いていた。

まずは鞆の中に詰め込んだ講習のテキストやノート類を放り出して、ペットボトルの水とカロリーメイト、その他旅に必要なものを詰め込んだ。行き先は決めていない。だけど、できるだけ遠くへ、というだけは考えていたから、着替えも入れといた。その辺にあったものを適当に掴んだら制服のワイシャツだったけど、まあいいや。夜勤明けの母親は起きているはずがない。いってきます、と声だけかけて、家を出た。

まるで家出みたいだけど、きちんと帰ってくるつもりだから家出じゃない。そう、これは旅だ。いつか、行き当たりばつりの旅がしてみたいと思っていた。そのためにお小遣いとバイトの給料を貯めていたわけだし。

外はひたすら暑かった。だからとりあえず北に行こうと決めた。今日は日本列島全体が真夏日らしいけど、まあコンクリートジャングルの東京よりはましだと思う。

要するに抜け出したかったのだ。

学校という檻から、勉強という枷から。

枷を嵌められ檻に閉じ込められていたら、いつの間にかいろいろなものを見失っていた。それはうまく言葉では言い表せられないけど、自分のことだったり、世界のことだったり、とにかくいろいろなものだ。ほかの人はどうかわからないけど、少なくとも僕はそうだった。そう気づいてから、学校が嫌いになった。それ以来惰性で通い続けて、今日も何の違和感もなく檻の中へ自分から飛び込んでいくつもりだった。ふと、それが怖いと思ってしまったんだと思う。だから、こうして学校に向かうのとは反対の電車に乗っている。ラッシュでもみくちやになりながら、上野駅に着いた。

地元から一番近いターミナル駅ということで、幾度となく来たことがある場所だけど、ラッシュ時間帯は人で埋め尽くされていて、まるで別世界だ。乗り換えた電車は、ラッシュと逆方向なものもあって比較的空いていた。無事に席を確保すると、ほどなくして電車が動き出した。

こうして、僕は旅に出た。

どこか知らない場所を目指して。

まだ見ぬ世界を探して。

列車はひたすら北を目指して進んでいく。それなりに立っている人もいた車内は、気づいたら数人が座っているだけになっていた。駅と駅の間も広くなって行って、東京から離れていくんだということを実感させられる。車窓も、ビルの多い都会から緑の多い、むしろ山や林や田畑の緑しか見えないような田舎へと変化していった。

しばらくすると終点に着いた。この路線は長すぎるから、部分部分に分かれているらしい。さらに北を目指すべく、三両編成のローカル列車に乗り換える。また終点。

二度目の乗り換えで、お腹が空いたから駅弁を買った。そこそこ大きな駅だったらしく、結構人がいたし、駅のお店も広がった。駅弁は駅ではなくて、車内のボックス席で食べた。

三度目に乗り換えた列車で、おばあさんに声をかけられた。

「学生さんかい。この辺じゃ見ない校章だねえ」

この人はこの辺の学校の校章を全部覚えているのだろうか。いや、覚えているのだろう。この辺の学校なんてたかが知れているだろうし。

「ええ、まあ……今、旅してるんで」

「一人旅かい。若くていいねえ」

快活に笑った。髪はほとんど真っ白だし、結構な歳だろうけど、正直東京の学生より元気に見える。彼らは、勉強やらなんやらに忙殺されて、みんな目が死んでいる。僕もその一人だ。

「学生さん。東京から、遠路はるばるご苦労さん」

「……なんで、東京から来たってわかったんですか」

「匂い、さね」

「匂い」

「そう。田舎もんは、田舎の匂いがする。都会っ子は、都会の匂いがする。学生さんからは、都会のせわしない匂いがするねえ。常に何かに追われてるような」

まさしくその通りだった。追われて飛び出してきた僕は、返す言葉もなかった。

「はっはっ、凶星かい。いいんだいいんだ、逃げ回ってられるのも、学生のうちだけさね。思う存分逃げ回るとき」

「……はい。ありがとうございます」

おばあさんは隣の車両に移った。また学生さん(今度は地元の子のようだ)に話しかけている。一種の趣味なんだろう。だから若々しいのか。

そして、おばあさんのいっていたことについて、考えてみた。匂い。都会の匂いがろくなもんじゃないことはわかったけど、田舎の匂いってどんななんだろう。結局都会に帰らな

やいけないけど、逃げ回ることによって田舎の匂いを少しは身につけられるだろうか。考えても結論は出なかったけど、いい暇つぶしにはなった。この路線はまだ北に続くけど、ここで名前も知らない私鉄ローカル線に乗り換えることにした。

学生がいっぱい乗っていた。登校日か何かで、ちょうどその下校時刻に重なったのだろう。一人だけ違う制服なのは、非常に違和感を覚える。疎外感とか、そういうものだ。このマジョリティが都会の子だったら、多少なりとも僕に疎むような奇異の目が向けられていたに違いない。だけど、彼らは違った。確かに気になるようで、僕のことを見てくる目はあるにはあるけど、純粋な興味からこっちを見つめているような感じだ。大体は僕のことなんか気にしないで、お喋りに興じていたけど。

これはいい機会だと、田舎の匂いを少しでも嗅ぎ取ろうとした。よくわからない。けど、なんとなく空気が暖かい気がした。それは別に、列車の冷房設備があんまり行き届いていないだけじゃない……はず。

やがて学生たちも続々と降りて行って、気づいたら終点だった。さびれた町、というのが第一印象だけど、たぶん間違っていない。降りた学生も一人か二人だったし。ふらっと歩き始めると、バス停を見つけた。時刻表を見ると、どうやら五分後にバスが来るらしい。ちなみにその次は三時間と五分後。つまり、三時間に一本のバス。これが田舎にしちゃ多いほうなのかはわからないけれど、都会の感覚だとあり得ない。

そうこうしているうちにバスが来たので、とりあえず乗ってみた。行き先は「見附」らしい。どんどころなんだろう。ここみたいにさびれたところじゃなくて、もう少し生きている気配がするところだといひ。

日がだいぶ傾いていた。泊まる場所を探さないといけないけれど、それよりも「見附」という場所への期待が勝っていた。まあ、さっきの駅前にも民宿のようなものがあったし、どうにかなるだろう。たぶん。



結論から言うと、見附は美しい村だった。まるで別世界だった。ぽつん、ぽつんと民家があり、畑があり、田んぼがあった。山の稜線は傾いた日を浴びて輝いている。日本の原風景とでもいえるような光景が、そこにあった。日本人が田舎と聞いて思い浮かべる小さな村の姿が。

「何呆けた顔してんの」

呆気にとられつつ村を歩いていると、声をかけられた。振り向くと、僕と同年ぐらいの少女がいた。肩口で切り揃えた黒髪に、白いワンピース。似合っている、と思った。

「……いや、綺麗だな、と思って」

村のことを言ったのか、彼女のことを言ったのか、我ながら定かでない。たぶんそのどっちもだと思ふ。

「あなた、探し物は」

唐突に尋ねてきた。いや、最初の一言も唐突だったけど。

「探し物……」

「そう。あるんでしょ」

どうしてそんなことを聞くんだらう。疑問に思っていると、それを見透かしたように説明してくれた。

「もしかして、この村の噂知らないの？ この村は、昔の領主さまがここでお嫁さんを見つけたから、見附って名付けられたんだ。それから、誰がいい始めたか知らないけど、ここに来ると探し物が見つかる、という噂が広まって、たまにふらっと来る人がいるの。てっきりまた噂を聞きつけてやってきた暇人かと思ったけど、その様子じゃ違いそうね」

酷い言い草だ。僕と同年か年下だらうに。

「……確かに探し物はあるよ。だけど、その噂は初耳。僕はただ、東京から抜け出たくて、なんとなく適当に電車に乗ってて、気づいたらここに来てただけ」

「へえ……おもしろいじゃない。で、その探し物って」

いうべきか迷った。いったら馬鹿にされるに決まっているからだ。だけど、目の前の少女の勝気な瞳に囚われたが最後、喋るしかないと思った。

「……自分と、世界」

「自分と世界」

聞き返してきた彼女に、学校でいろんなものを失った気がするということを話した。非常に感覚的なものだから説明するには苦労したけど、彼女はよく聞いてくれた。

「なるほどね……あなたのことは全然わからないから何とも言えない。それは自分で探してもらうしかないと思う。けど……世界のことなら、心当たりがあるわ」

「はい？」

「学校という檻の中で世界を見失ったあなたに、世界を見せてあげるわ。急がないと時間がない、行くわよ、ついて来て」

彼女についていったら、そこは森の中だった。というか山だ。目の前を慣れた足取りで歩く少女は、さっきから「時間がないの、急いで」といってさらにスピードアップして、長旅で多少なりとも疲れの出ている僕をせかしていった。世界を見せる、ってどういうことだろう。世界というのは概念的であり、また目に映るものすべてでもあるという、非常に複雑なものだ。これが世界だ、といて示すことができるわけがない。

「ふー、何とか間に合った」

急に彼女が立ち止った。慌てて追いつくと、そこは小高い丘というか山の上だった。

それは絶景だった。この丘はどうやら見附村を俯瞰できるらしい。小さいながら綺麗な村を夕日の輝きが照らし、一枚の絵画のような素晴らしい光景である。

「これが、世界よ」

確かに、見附村という一つの世界が、ここから見下ろせた。だけど、僕はこの世界の住人ではない。

「あなたの住む世界とは違うかもしれない。だけど、これだけは忘れないで」
僕の前に回り込み、手を大きく広げて、彼女が言った。

「どんな世界でも、絶対にこの風景のような美しさがあるんだってこと」

はっとした。

「あなたの世界は、すごく暗いんだと思う。だけど、暗いだけの世界なら、人間生きていけない。どこかに、この夕日のような灯火があるはず。それは暗ければ暗いほど、明るく輝くのよ」
学校生活は、暗いことばかりではなかったはずだ。友人との他愛もない雑談とか、馬鹿騒ぎとか。檻の中で枷をさせられるけれど、それでもそれを忘れて過ごすことができるひと時が、確かにあったはずだ。

「だから、これが世界。世界はこんなにも美しいものなのよ」
そう言って、少女は満足そうに微笑んだ。



やがて日が暮れると、僕は泊まる場所がないことを悟った。どうやら日没のころが駅前行きの最終バスだったようだ。馬鹿、などと毒づきながらも、少女とその家族の厚意で、彼女の家泊めてもらうことになった。実際、例の噂を聞きつけてきた旅人が帰れなくなるケースはよくあることらしい。ほかの旅人が何を探しに来たのかなど、たくさんの話を聞くことができた。民宿などでは味わえない経験だ。

翌朝、始発のバスで帰路に就いた。名残惜しいが、早く東京に帰らねばならなかった。東京に帰って、美しいものを探さないと。自分というものについても、ちゃんと見つけないと。

探し物は、まだまだ続きそうだ。

Fin.

あとがき

ごめんなさい。×切を大幅に過ぎてお送りしております織村紅羅璃です。

最近文章書いてないから…物語を創造する段階から行き詰り、文章化に時間を食い、気づいたらこうなっていました。なんということでしょう……

この小説は、大学オケの合宿出発日、大学へ向かう電車の中でふと降りてきたアイディアに基づいています。セカイ系な何かになるかと思ったらむしろ中二病です本当に以下略。列車とかバスとか村とか全部架空の存在ですが、東北地方太平洋側のどこかにあると思われれます。岩手だといけど、鈍行で岩手まで行くと朝出発しても日没に間に合わなかったような…(この前調べたけど忘れた)。終わり方が果てなく微妙になってしまったのが残念です。どうやってきればいいのかわからなかった……なんだか竜頭蛇尾な気がします。

さて、近況報告しましょうか。

ICU(Isolated Crazy Utopia)に通ってます。大学のオーケストラとペン(先)クラブという文芸サークルに入ってます。つまり高校時代一合唱=現在。ほとんど変わってませんねw

作曲や編曲の勉強を始めてます。趣味ですが。なかなか難しいですが、楽しいです。

いくつか作詞で同人CDのほうに参加してます。ホームページで告知なう。

相変わらずヴィオラ弾いてます。大学のオーケストラ以外に、美少女ゲーム音楽をまじめに演奏する、がコンセプトのオータムリーフ管弦楽団に入団しました(つい昨日:8/29)。オータムリーフの本番は10/3@江戸川区総合文化センター、大学オケの本番は11/22@杉並公会堂です。是非聞きにきてください。

それでは、私にしては短いあとがきですがこの辺で。だって眠いんですよ、今午前4時50分なんですs

またどこかでお会いしましょうっ！

織村紅羅璃

HP: http://www.geocities.jp/paradise_kurarin/index.html

twitter: s_kurari

追記

あとがきを書き終わった時間は5時ジャストでした。やったね!(え

電子書籍化にあたっての編集後記

電子書籍化にあたっての編集後記

なんか謝らなきゃいけないことはたくさんあるんだけどとりあえず具体的なこととしては

- ・原稿をくれたときのと微妙に文の区切りとか配置が変わってしまったこと
 - ・肇さんの画像をうまく配置するのができなくて素敵な文章を汚くしてしまったこと
 - ・くらりさん御希望のタイトル用フリーフォントがダウンロードできなかったこと
- をごめんなさい。

Low qualityだけど許してね。

当日会えるの楽しみにしてます！

おわりのページ

おわり